

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2014 夏号

67

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集
平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査



特集 平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査

平井遺跡は和歌山市平井に、東側に隣接する平井Ⅱ遺跡は和歌山市大谷に所在しており、現在の紀ノ川河口から約5km遡った右岸の丘陵裾部に位置します。古墳時代～古代

(6～9世紀)には、紀ノ川の流路が現在より北側を流れていたとされ、平安時代の文書にはこの地にあったとされる「平井津」の記述がみられるなど海運が栄えていたことが推測されます。周辺には国指定史跡の大谷古墳をはじめ鳴滝遺跡や楠見遺跡など古墳時代の遺跡が多数存在している地域でもあります。

これまで平井遺跡・平井Ⅱ遺跡では一般国道26号第二阪和国道の建設工事に伴い、4回の発掘調査を行っています。

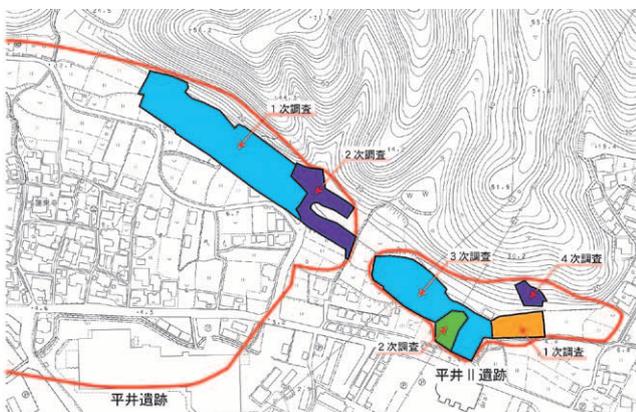
1回目の平井Ⅱ遺跡の調査(第1次調査)では、古墳時代の竪穴遺構を1基検出しており、多数の初期須恵器が出土しています。組紐紋や竹管紋等を施し、南東に隣接する

楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する点があります。また、円筒埴輪及び形象埴輪も出土しています。

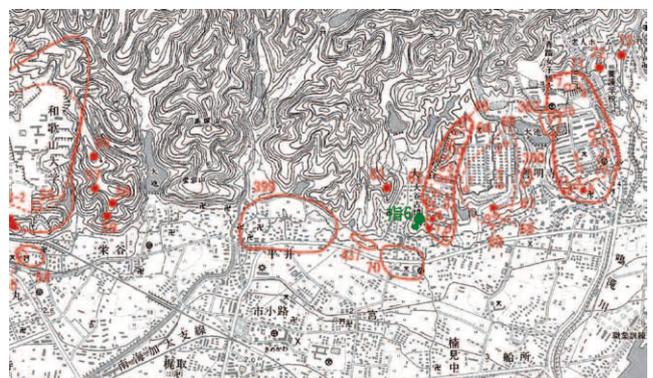
2回目の平井Ⅱ遺跡の調査(第2次調査)では、中世の瓦器や古墳時代の初期須恵器が出土しています。乳状突起を付した甕或いは壺の破片が2点出土しており、この遺物は楠見遺跡など限られた遺跡のみ出土しています。

今回紹介するのは、3回目の平井遺跡(第1次調査)と平井Ⅱ遺跡(第3次調査)の調査成果です。平井遺跡で6,495㎡を対象に、平井Ⅱ遺跡で3,636㎡を対象に調査を行いました。合計面積は10,131㎡となり、平成25年7月から平成26年3月の期間に発掘調査を行いました。

平井Ⅱ遺跡では、調査区の中央南側で、南側を除くコの字状の杭列とその内側で掘



調査地位置図



399 平井遺跡 437 平井Ⅱ遺跡 70 楠見遺跡 指6 大谷古墳
62・64・65 晒山古墳群 63 慶円寺裏山古墳 66～69 雨が谷古墳群
360 雨が谷遺跡 71 鳴滝古墳群 362 鳴滝遺跡

遺跡位置図



杭列と掘立柱建物

立柱建物と考えられる柱穴を検出しました。西列で9本、北列で8本、東列で7本の計22本（うち2本は重複）を検出しました。また、調査区の東端で検出した土坑からは、初期須恵器と考えられる高坏の坏部が出土しています。

平井遺跡では、古墳時代の遺構として調査区西端の丘陵裾部で、古墳の横穴式石室を検出しました。古墳の横穴式石室は後世



横穴式石室

の大規模な削平により上部が残存しておらず、底部の石が2段分ほど残っているのみです。また、石室から西に約12m離れた位置では、石材が抜き取られたと考えられる石室の痕跡を検出しました。

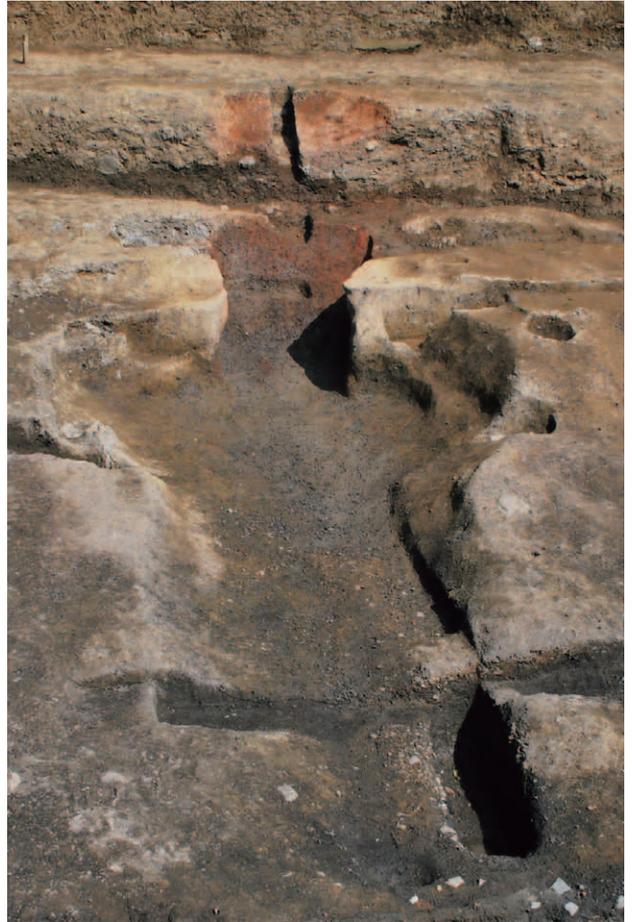
両遺構の周辺からは土師質の亀甲形に分類される陶棺の破片が多く出土しています。陶棺の破片の出土は県内では4例目となります。時期的には横穴式石室よりは古い時



陶棺

期と考えられます。陶棺は岡山県や奈良県北部などで多く出土していることから、これらの地域と関係のある人物が埋葬されていたのかもしれませんが。

また、調査区東側の丘陵裾部で埴輪窯が2基発見されました。県内では、和歌山市の森小^{もりおて}手穂^ほ埴輪窯跡などが従来から知られていましたが、発掘調査は行われていませんでした。そのため、平井遺跡の埴輪窯が



1号埴輪窯 床面3全景



2号埴輪窯 床面5全景

和歌山県内で初めて発掘調査を行った埴輪窯の事例となります。近畿地方では、大阪府高槻市の新池遺跡や、奈良県奈良市の菅原東遺跡などが埴輪窯の調査例として広く知られています。

1号埴輪窯の周囲からは排水溝や覆い屋の柱穴などの付帯施設は検出されておらず、上部は後世の削平を受けていたため、煙道部は残存していませんでした。窯壁には粘土の貼り付けなどはありませんが、被熱により焼けて赤くなっているのが明瞭に見られます。焼成部の深さは約0.3mで床面の傾

斜角度は約28度です。焼成部内部の堆積状況から3回程焼成が行われていた可能性が考えられます。内部から出土した埴輪は、土師質の円筒埴輪の他、石見型埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪も含まれます。

2号埴輪窯は1号埴輪窯から東に25m離れた場所で検出しました。1号埴輪窯と同じく付帯施設は検出されず、上部が削平を受けていたため煙道部は検出されませんでした。1号埴輪窯と比べて灰原の残りが良く、炭と焼土が交互に堆積しており、多くの埴輪が出土しています。焼成部の深さは

約0.6mで床面の傾斜角度は約23度です。焼成部内部の堆積状況から6回程焼成が行われていた可能性が考えられます。内部から出土した埴輪は、一部須恵質のものもみられますが、土師質の円筒埴輪が中心であり、横向きに並べて置かれた状態で出土したため、床面に据えて焼台として利用されていたと考えられます。他に朝顔形埴輪や家形埴輪、馬形埴輪などの形象埴輪も出土しています。

2号埴輪窯の南東側の包含層からも多くの埴輪が出土しており、埴輪窯や近隣の古



2号埴輪窯 焼成部床面2



家形埴輪



人物埴輪



双脚輪状文埴輪



双脚輪状文埴輪



胡籙形埴輪



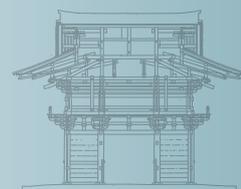
馬形埴輪

墳との関連が考えられます。円筒埴輪が多いですが、石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、人物埴輪などの形象埴輪も出土しています。これまで紀ノ川南岸でのみ出土していた胡籙形埴輪、双脚輪状文埴輪なども含まれており、岩橋千塚古墳群と何らかの関係があるのかもしれませんが。

従来の研究では、古墳時代における紀ノ川北岸の勢力と南岸の勢力との関係について

て、5世紀に大谷古墳や車駕之古址古墳といった大型の前方後円墳を造った紀ノ川北岸の紀臣系きののみの勢力から、6世紀に入って大型の前方後円墳が造られた岩橋千塚古墳群のある南岸の紀直系きのあたえの勢力に権力の中心が移ると考えられています。しかし、紀ノ川北岸にある平井遺跡において紀ノ川南岸の埴輪の特徴である、結晶片岩を含む埴輪も出土していることから、埴輪の生産に関

わった工人の移動や埴輪自体の移動を検討するとともに、紀ノ川南岸勢力の影響が紀ノ川北岸に及んだ可能性も考えられるなど、従来の研究を再考しなければならぬ成果が得られました。出土した埴輪の整理はこれからですが、紀伊における埴輪生産や古墳の展開過程、地域の勢力関係を解明する上で、非常に重要な発見といえます。(山本 光俊)



東照宮の保存修理

和歌山市和歌浦の東照宮は、紀州藩初代藩主徳川頼宣により元和7年（一六二二）に建立され、本殿・石の間・拝殿、唐門、東西瑞垣、楼門、東西回廊の合計七棟が重要文化財に指定されています。寛永13年（一六三六）に現在の姿に整えられた日光東照宮と同様に、各建物は華麗な彫刻や塗装などで荘厳に飾られます。



写真1 竣工した唐門

唐門のそそり立つ神域正面の石垣上は、その美しい漆塗や塗装を鑑賞するには絶好の配置であるが、それは和歌浦の強い日射しや風雨にさらされ続けることでもある。

日光東照宮は、建立時に後の修理にかかる予算まで含めて計画されたということですが、和歌浦の東照宮も江戸期を通して繰り返し修理を受けています。これは屋根の多くが檜皮葺であり、三〇四〇年ごとに葺き替える必要があることに加え、建物外周の塗装にも漆が多用されていることにあります。漆は正倉院の宝物にも数多く施され、現代に古代の美しい艶を伝える堅牢な塗装でありますが、直射日光や雨にさらされると艶が失われ、割れてしまいます。美しい姿を保つには、定期的な修理を繰り返すことが必要なのです。東照宮とは単に豪華な装飾を建物に施しただけでなく、それを常に美しく保つこと自体が、徳川の威信の象徴そのものであったと考えられます。

和歌浦の東照宮は平成12年に大規模な修理を実施し、全体としては健全な状況であるものの、神域の南端で直射日光を受け、和歌浦湾からの潮風の影響も大きい唐門や瑞垣正面の漆塗の劣化が目立ち始め、一部



写真2 瑞垣足元の漆塗修理状況

何層にも塗重ねられた漆塗の修理は、劣化した部分のみを丁寧に落とし、健全な下地を整えてから仕上げの漆を施していきます。

では下地まで割れや剥離が進んできたため、前回未施工であった瑞垣側面の檜皮屋根葺き替えや本殿・石の間・拝殿の部分修理等とあわせ、平成25年度の国庫補助事業として修理を実施しました。

漆は29工程が必要な本直しから、下地を残して仕上げ面のみ塗り替える上塗り直しなど、破損の程度にあわせて修理方法を使い分け、最適な修理が行えるよう施工には細心の注意を払いました。（多井忠嗣）

「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」『方丈記』

鴨長明はこの世の儂さを憂い、組立式の小屋（方丈）を車に載せ、山へと遁走します。丈とは長さの単位でおよそ3m、つまり『方丈』とは、3m四方、四畳半ほどの広さを表します。

長明ゆかりの下鴨の河合神社にこの方丈が復原されていますが、案外快適そうな建物です。しかし四畳半という広さ、現代では子供部屋としても手狭な感じですが。大正時代に建てられた温山荘園の建物でも、座敷以外は主屋が八畳、小さな浜座敷でも六畳が基本となり、和室にも机や椅子を置いて使っていたことが古写真からわかります。現代的な生活スタイルのルーツとも言えそうです。

一方棹縁天井に長押、床の間がつく和室のおなじみの様式は、銀閣寺に残る室町時代の東求堂が現存最古の例と言われます。足利義政が使った部屋は意外にせまく四畳半ですが、中に座り、書院窓にたゆたう光を見てみると、なんともしつくり落ち着きます。

有田川沿いの旧清水町には、法音寺本堂と吉祥寺薬師堂という双子のような室町時代の仏堂が残ります。三間四方で茅葺きの小さなお堂の中は、格子で内陣が区切られています。方丈ほどのタイトな空間でお厨子と向き合うと、中世からゆったりながれる時間のなか、かわらぬ仏さまに優しく包みこまれるように感じます。

（多井 忠嗣）



法音寺本堂の内陣。
方丈の広さに格子で優しく区切られている。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

最近ブレイク中の俳優・西島秀俊主演のTVドラマ「MOZU」が喫煙シーンの多いことで話題になっていましたね。たしかに映画やテレビからいつのまにか喫煙シーンが消えつつあります。筆者の子ども頃の頃のドラマ「事件記者」（昭和33年～41年）では記者倶楽部はつねに煙草の煙でもうもうとしていました。時代ですねえ。

ところで喫煙という風習は新大陸由来のもので、ヨーロッパ、さらには日本へともたらされるのはどれほど早くても15世紀末以降ですね。ですから煙草に関する遺物が出土するのは、戦国時代から近世以降の遺跡に限られます。和歌山県でいえば、根来寺遺跡・和歌山城跡・田辺城下町遺跡といったところでしょうか。

もともと煙草そのものが出土することはなく、喫煙具である煙管、火種を入れておく火入、灰を捨てる陶製の灰落などの類が遺物として確認されます。とくに多いのが煙管ですね。

発掘調査で確認されている最も古い例としては、静岡市の駿府城跡から出土したものです。駿府城は、ご存知のように家康の隠居所として慶長12年（1607）に築造されていますが、問題の煙管が出土したのはそれ以前の層ですからかなり古くなる可能性があります。実際、その形を見ると、火皿の下から延びる「脂返し」と呼ばれる部分が、大きく緩やかに湾曲する古いタイプのようです。（一般に煙管は、時代を経るにつけて火皿は小型化していき、脂返しは屈曲も減少していくことが知られています。）

仙台藩主・伊達政宗の墓所の改葬に伴う発掘調査でも豪華な副葬品にまじって、梨地の箱に納められた政宗愛用の品と思われる煙管が2本出土していますね。おそらく単なる「伊達」ではなく、実際に彼はヘビースモーカーだったと思いますよ。なにしろ草創期の幕府、とりわけ酒井・井伊といった幕閣連中にとっては煙たい存在でしたからねえ——。

（村田 弘）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2014年春～2014年夏)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 「地宝のひびき - 和歌山県内文化財調査報告会 -」 2014年 7月13日 (日) 13:00～16:45
きのくに志学館 (和歌山県立図書館) 2F 講義・研修室

和歌山県立紀伊風土記の丘

- ミニ展 「新収蔵品展」 2014年 6月24日 (火) ～7月 6日 (日)
- 夏期企画展 「熊野地域の考古学」 2014年 7月23日 (水) ～8月31日 (日)

和歌山県立博物館

- 企画展 「紀伊徳川家の家臣たち」 2014年 6月 7日 (土) ～7月13日 (日)
- 企画展 「文化財に親しもう！」 2014年 7月19日 (土) ～8月31日 (日)

和歌山市立博物館

- 特別展 「荘園の景観と絵図」 2014年 7月19日 (土) ～8月24日 (日)

高野山霊宝館

- 春期企画展 「火災と高野山一よみがえるその歴史と暮らし」 2014年 4月26日 (土) ～7月13日 (日)
- 第35回高野山大宝蔵展 「高野山の名宝」 2014年 7月19日 (土) ～10月5日 (日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 平井遺跡 2号埴輪窯
- 2 特集 「平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査」
- 6 文化財建造物課 短信 「東照宮の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話 「古建築修理の逸話⑧ 方丈」
「発掘屋余話⑥ 煙管」
- 8 催し物案内



風車67 (2014・夏号)

平成 26年 6月 30日

(公財) 和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財) 和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

maizou-1@wabunse.or.jp

7月1日より、事務局が上記の住所に移転しています。